伊藤幹哲句集『深雪晴』管見

真直ぐに伸びゆく新雪の道を

伊藤幹哲氏の初句集『深雪晴』を鑑賞した。

本集は、氏が「馬酔木」入会後、わずか七年で上梓されているが、このような例は寡聞にしてそう多く見かけない。かくも短い句歴でもって句集上梓を成し遂げられた要因は、偏に氏の卓越した才能とご努力ご精進によるものであり、このことはこれまでの顕著な実績が物語る。

すなわち、氏は令和二年の「水原春郎の風景句」による俳人協会第七回新鋭評論賞準賞を皮切りに、同三年一月には、「白南風」により第十二回北斗賞、続いて二月には、「落葉松霧氷」により俳人協会第五回新鋭俳句賞を受賞。同四年一月には、「馬酔木」同人に推薦されている。

本集は、「落葉松」(五十三句)、「白南風」(五十七句)、「秋燕」(六十四句)の三章に分ち、全百七十四句の作品が収載されている。この数は、秋櫻子の『うたげ』と同じというのも妙で、氏の濃やかな配慮が覗える。

本集の第一章名の「落葉松」は、冒頭に掲げられた追悼句、

からまつをはるかにゆきのふるおとか

とともに、師と仰ぐ根岸善雄氏に対する鎮魂の表出である。

根岸氏は、今年の一月に急逝された。長年、馬酔木の同人会長として尽力され、後輩の育成にも人一倍ご熱心な方で、その指導を一身に受けられたのが氏と言っても過言でない。このことで思い出すのは、俳人協会新会員推薦のことである。平成三十年度の新会員に、氏を推薦されたのが根岸氏であり、それも若手枠(五十歳未満)であった。数年間、同事務を担当していたこともあり、根岸氏が「うちの伊藤君はまだ三十歳だよ」と得意満面の笑みを浮べて紹介されたことが、昨日のように蘇る。

根岸氏は、若くして秋櫻子のもとで学ばれ、その句風は根岸氏の代名詞「落葉松」が代表するように自然詠に特徴がある。このことは、氏についても言えることであり、先ずは本集の自然詠を見ていくこととする。ここでは、自然詠を大きく風景句と生物句に分ける。

風景句を掲げる。

銀漢を背負ふ落葉松霧氷かな　落葉松

大寒の底に落ち合ふ峡の径

月明の山頂に雪炎立つなり

立春や杉の根方に射すひかり

滴りに一山の音聴きにけり　白南風

滝落ちて自在の水となりにけり

峰雲の落ち込む湖の碧さかな

月を得てうしほの匂ふ大鳥居　秋燕

奥宮のせせらぎに月祀りけり

薄雲と沖ひといろにしぐれけり

ひむがしの雲焼くるなり初氷

雪の上に雪降るのみの夕禱

生物句を掲げる

白日へまばゆき鷹を放ちけり　落葉松

神南備に暁雲高し鵙の声

深空より夜の降り来たる蚕の眠り

引鶴のこゑ夕空を透きて降る

生まれし鹿すぐ立ち上がる夜明けかな　白南風

ひとひらの光曳きくる竹落葉

青麦の風になびけるひかりあり

南冥や梯梧散り敷く石畳

鵺のこゑ山麓を闇包みゆく　秋燕

暁闇の底滴らす草雲雀

遠嶺より風立つ鷹の渡りかな
みづうみに宵の雨あり新松子
白鳥に純白といふ重さあり

眼目は風景句四句目の「ひかり」、生物句六句目の「光」、七句目の「ひかり」の措辞にある。坂口昌弘氏は「馬酔木の系譜」（馬酔木第六十三巻第六号）で〈厨子冷えて玉虫光るひとところ〉（水原春郎）を挙げ述べる。

写生を極めると光に出会う。春郎の玉虫の光は美術品に使用された玉虫だが昆虫の命がなくても玉虫は日本の宗教芸術の歴史を貫き光輝いてきた生命である。玉虫の光を捉えたのは菊のまとう光を捉えた秋櫻子の美意識の系譜にあり、古代の美術品や仏像に魅せられた秋櫻子の系譜でもある。

右に挙げた三句に象徴されるように、氏の自然詠は秋櫻子の系譜を正しく継承しているのであり、それはまた根岸氏が生涯かけて貫き徹した方向でもある。そのような句風を、ともすれば「馬酔木的」と称して軽視する傾向にあるが、これについては有働亨氏の論を引く。

「馬酔木的」という形容詞の意味するものは恐らく「流麗な」、「華麗な」ということではないかと思う。「馬酔木」独立当時の「馬酔木」の句風を判断の物差しとした偏狭な誤解であり、私はそのような声には『馬酔木』をもう少しよく勉強して下さい」と答えることにしている。私自身は、「馬酔木」の「馬酔木」たる所以は素材の偏向的選択に非ず、叙情と調べの重視であると考えており、これに波郷の唱えた「韻文精神の昂揚」を加えることを信条としている。

氏には、世の風潮に惑わされることなく馬酔木の王道を歩み、そして究めて頂きたいものと思う。いたずらに新しさを追い求める余りに、「結社」本来の伝統が希薄になることは、結社そのものの存在を否定することに繋がる。俳句界は、土台が個人のみを以てしては発展も存続も無いのであり、各結社が各々の独自性を保持し、相互に競い合ってこそ成り立つものであることは、長い歴史が示しているところである。

ところで、本集が根岸氏へ捧げられたものであることは前述したが、あとがきにあるように、ご母堂へ捧げられたものでもある。そして、本集の底を流れているのは、ご夫人とお子さんへの篤い思いである。これらに係る作品は人事詠ないし生活詠の範疇で以下、順を追って掲げる。

ご母堂に係る作品を掲げる。

病む母に少女の眠り月涼し　秋燕

母逝く　八句

流星や冷えゆく母の手を握り
胸元に秋の灯淡き湯灌かな
棺待つ手のひら熱し昼の虫
口を嚙み妣に秋暑の足袋履かす
秋燕や光あつめて出す棺
捧げ持つ位牌秋風より軽し
底紅や悔みに返すことばなく
出棺のあと蜩のこゑ勁し
喪葉書をポストに落とす霜夜かな
母在りしゆふべのごとく葱洗ふ

ご母堂のご逝去は令和三年八月、まだ六十歳の若さであったと聞く。病床の作品がわずか一句であることからも、急逝されたのであろう。それだけに、どの作品にも作者の深い哀しみが滲む。最後の句、「まだどこかに母が居る」との思いが捨てきれない作者である。

ご母堂の逝去される以前に、ご祖父を亡くされている。

春雪を蹈みしめ柩運びけり　落葉松

作者の亡きご母堂への思いは、また、ご尊父への思いを深くする。

遺されて父と北窓塞ぎけり　秋燕

夫婦の別れは、妻（夫）を亡くした者でなければ決して分からない。その

悲嘆さは、たとえ子とも、孫とも等しく分かち合うことは無理なことである。そのようなご尊父に、思いを寄せる作者である。

ご夫人に係る作品を掲げる。

細雪降れり産声待つ廊下　落葉松
子の皿に氷取り分く夏料理　白南風
襁褓持つ妻より逃ぐる裸の子
産湯より子を抱く妻の胸の汗
白南風や子の名書き足す母子手帳
耳あてて聴く胎動や寝待月　秋燕

あとがきのどこにも言述されていないが、本集はご夫人とお子さんに捧げられたものとも言えよう。昔と違い今の時代は、一子を育てるのも容易でないが、ご夫妻には若くしてお二人のお子さんである。どの作品も、作者の妻に対する思いが巧まずして詠まれ、読む者をして和やかな気持ちにさせる。二句目の氷を取り分けるのは父親ともとれようが、「夏料理」とあることから母親と解したい。三句目はなんとも微笑ましく、四句目からは子育ての懸命さが髣髴し、五句目は「白南風」の季語が効いて心地よい。最後の句には、作者の心根のやさしさが滲む。

お子さんに係る作品を掲げる。

泣初のはじめは息を止めにけり　落葉松
肩越しに子らの顔出す初鏡
掌の中の小さき手息白し
淡雪と聴き分けしより子と眠る
抱く吾子の四肢より眠る花疲
菖蒲湯の吾子と零まで指を折る　白南風
如雨露より虹の生れぬ子供の日
テーブルを伝ひ来る子や豆ご飯
日焼子の諸手を挙ぐる肩車
てんとう虫子の掌に微熱あり
夕端居胡座の膝を子に分かつ
子にことばゆつくり返す夜長かな　秋燕
抱く嬰に柚子湯のゆづの溢れ落つ
石鹸の香とすれちがふクリスマス
這ひ這ひの転がしてゆく毛糸玉

右に掲げた作品は一部で、お子さんに係る作品は全部で三十一句にのぼる。それぞれの作品は、その成長ぶりを端的に表すとともに父親の愛情の証でもある。さぞかしや、お子さんが成長され人の親となられた時にこそ、それぞれの句が重い意味合いを以て語り掛けるに違いない。

氏の俳句に向き合う真摯な姿勢は不変であり、持味の透明感と叙情性に富む自然詠が、広く俳壇で確たる地位を占めることを期待する。

秋櫻子は語る。（秋櫻子全集第六巻「風景作者の言葉」）

作者の持味は、カメレオンのごとく変わり得るものではない。おそらく一生を通じて、作者から離れ得ぬものであろう。ただ作者は、次第に成長してゆくから、持ち味の上に新しさが加わり、強さが加わり、そして終に深さが加わって自己の芸を完成してゆく。

本集のあとがきは、句集では異例とも思われる俳句の本質論に及んでいる。ここではその詳細は控えるが、「有季定型切字の可能性を深く信じている。自らの心の動きを表現するにあたって、生涯をかけて追究していくべきことだと思っている。」と述べ、最後に「たとえ雪が降りしきるとしても、いつかは必ずやむ。中略。真っ直ぐに伸びゆく一本の道を、ゆっくりと踏みしめながら歩いていくつもりである。」と結ばれている。

伊藤幹哲氏の何卒のご健勝ご活躍を衷心よりお祈り申し上げる。

令和四年十月　菊日和に

今田　清三